

社報 御霊本宮

第87号

発行者

御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市霊安寺町
0747-23-0178

発行日

令和3年
10月1日

瑞穂の国のトンボ

古事記には、日本は「豊葦原の瑞穂の国」と記されています。言葉のとおり、豊かな広々とした葦原のように、みずみずしく美しい稲穂が実る国という意味です。

弥生時代になって人が低地に定住して米作りを始めると、河川付近の平原や湿地は、もともと米作りに適した土地でした。



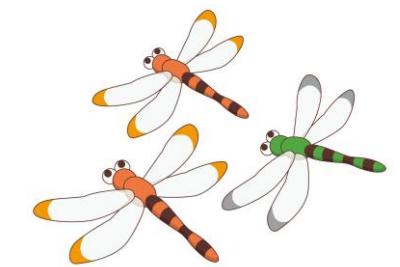
当時の地形と現代の地形では、かなりの違いがあると思われませんが、現代の沖積平野のほとんどが、氾濫河川敷や葦原の低湿地だったと考えられます。そしてそこは美しい瑞穂の国だったはずです。

日本の神様は米作りをしていたことで知られるように、神・神道・天皇と米作りは切り離すことのできない特別な関係になっています。そして、瑞穂とは美しさと豊かさの象徴となつていきます。

さらに、この瑞穂の国にはたくさんのお稲穂が群れていたはずで、トンボは豊かな実りの象徴となつていたことでしょう。弥生時代の銅鐸にもトンボの姿が見られ、豊作を祈願する信仰であったことがうかがわれます。

現代でも、稲刈りの終わった頃、秋晴れの空にたくさんのお稲穂が

乱舞するところが見かけられますが、なんともどかな気分になります。



さて、瑞穂の国の人々が最もなじんだトンボはいったいどんなトンボだったのでしょうか。

瑞穂の国の人々に最もなじんだ葦原のトンボは、現代では最も減少したトンボと考えられます。平野部は都市化が進み、湿地がなくなり、水は農薬等の影響で生物が棲めなくなつていくことが多くあります。

その点、高山の池や溪流は昔のままのところが多く、トンボも昔のままかもしれません。系統的に古いことで知られているムカシトンボやムカシヤンマは、いずれも山中のトンボです。瑞穂の国の人々とともに暮らしたトンボであつたのかもしれない。

くそが(ら)ひ (へくソカブツ)

自莢に 延ひおぼとれる 屎葛
絶ゆることなく 宮仕せむ

高宮王 卷十六・三八五五

自莢に這いま

どいついた屎葛のように、絶えることなく宮仕えをしよう。



朝廷を自莢に、自分を屎葛に置き換えて詠んでいます。能力でなく、世襲や派閥により出世できない自分を嘆いているのかもしれません。

屎葛の花は全体が白く中心部が紅紫色のかわいい花ですが、茎や葉を揉むと悪臭がするのでこの名が付いています。田植の頃に咲くことからサオトメバナという別名もあります。屎葛という名前が嫌われたのか、万葉集にはこの一種しか詠まれていません。

観月祭 盛大に

九月二十一日は中秋の名月でした。毎年、仲秋の名月の日に観月祭を斎行しています。

今年は今年中は晴れていたもの午後から曇り空となり、雨が降ることも心配されるような空模様でした。幸いにも雨は降りませんが、厚い雲が東の空を覆っていました。

雅楽の演奏が始まり、祭典開始の五分前に、丸い大きな月が雲間から現れ、参列者は喜びの声を上げてシャツターを切っていました。

午後七時、神事が厳かにはじまりました。参列者の皆さんには、用紙に祈願を記入していただき、燈火を参道に置いていただきました。

本社の参道は東向きのため、月出の頃は鳥居の間から見る事ができません。神事が終わる頃は鳥居の上に名月を望むことができます。月明りと燈火のカラフルな色が暗くなった境内に広がり、幻想的な雰囲気になりました。

去年は快晴でしたが、今年は雲が漂っていました。月の光に照らされた雲と名月のコラボがまた何とも言えない趣がありました。

来年は九月十日で今年より約二週間早くなります。

今年も平日ですが来年は土曜日なので多くの参拝とともに名月を愛でたいものです。



秋季例祭日程

九月末に役員会があり、秋季例祭の実施について話し合わせ、日程が左記のように決まりました。

今年の当歳児御神楽は本社で行われます。本社の燈火祭と御旅所での抽選会は誰でも参加できます。ぜひ御参拝ください。なお、ろうそく・景品が無くなり次第終了となります。

- 二十三日(土)
 - 十三時 本社例祭・神幸祭
 - 十四時 神幸(お渡り)
 - 十五時 御旅所宵宮祭
 - 十八時 当歳児御神楽(本社)
 - 燈火祭(本社)
- ※受付十九時半まで
- 二十四日(日)
 - 八時半 御旅所例祭
 - 抽選会(〜十一時)
 - 十時 当歳児御神楽(〜正午)
 - 十三時半 本社還座祭

天之宇受売命

八百万の神々

素戔嗚尊が高天原で暴れたために、天照大神は天岩戸と呼ばれる洞窟に隠れてしまい、世界は暗黒に包まれました。天照大神を天岩戸から出すために活躍した女神です。

古事記には「天の日影を手次にかけて天の真折を鬘として小竹葉を手草に結びて覆槽伏せて踏みとどろこし、神懸りして胸乳をかき出で裳の緒を陰に忍し垂りき」とあります。植物のヒゲカズラをたすきにしてマサカキノカズラを頭にのせて笹の葉を手にとって、桶を伏せてその上に乗り、踊り出したのです。神がかりしたように狂喜乱舞し、裸になって踊りました。それを見た神々は大笑いしたため、天照大神は何事かと外の様子を見るために岩戸を開けたところを天手力男神に引き出されたのです。高天原はこれにより明るい世界に戻りました。

五條十八景を訪ねて

第八景 「二見耕人」

ばくろうせいせい
麦浪青青として 夏日長し
うんこう
耘耕 手倦み 汗漿となる
ぼうじん
傍人に問ひ得たり 老農の意
せじ
世事に忙しく 農業に忙しと

麦の穂が青々と風になびき、夏の日が長々と照っている。耕す手もすつかり疲れ、汗は水のように滴り落ちる。道行く人に年老いた農夫の気持を聞くことができた。世渡りに追われ、農業に忙しく、毎日あくせくと暮らしている。



二見は二水で、吉野川と丹生川の出合にある地域を意味しています。太古の昔は、稲作をはじめ恵みの水に感謝したり、洪水となればその被害を嘆いたりしたことでしょう。

二見神社の近くには湧水地があり、きれいな水がこんこんと湧き出ています。



この湧水地は奈良県の「やまとの水」に選定されています。

このように昔から「水」に恵まれた地域ですから、農耕が発達したのは当然といえます。田畑が随分と広がっていたことが絵から想像できますが、今は住宅が立ち並び、当時の面影はありません。しかし、世渡りに追われ、仕事に忙しく、毎日あくせくと暮らしているのは、当時も今も変わっていないように思います。



五條文化博物館では秋季企画展「神を守る狛犬たち」を開催します。社頭にある石造の狛犬ではなく、本殿内に安置されている木造の狛犬を展示します。地元の人でもほとんど知らない狛犬たちです。

会期は十月三十日(土)～十一月十四日(日)で、月曜日と祝日の翌日は休館日となります。

Instagram @goryohongu
Twitter @goryohongu

#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。
公式ホームページ
<http://goryojinja.or.jp>



秋祭りとは

コロナ

今年も新型コロナウイルスの感染拡大により、祭りや関連行事が相次いで中止になっています。感染防止と云われると中止に反対することができません。面倒なのでコロナを理由に中止にしようという考えの人も少なからずいるようです。役員さんの中には、「なんでもかんでも中止にしたらあかん」と憤る人もいます。

来年は神輿を出せなくても、軽い鳳輦というものを出してお渡りをしようと考えています。また、来春の二年に一度の大祭でも、恒例の大餅まきを実施しようと考えています。

コロナ対策は三密を避けることですが、祭りは真逆です。しかし、実施は無理と思うことでも、よく考えてみると実施できる方法があるものです。

今年も少しですが祭りを盛り上げるための行事を考えています。

日本書紀にみる

十二代 景行天皇(四)

天皇は好ましくないといい、進みませんでした。来田見邑に留まって、仮の宮を建てて住みました。

群臣と謀って「多くの兵を動かして土蜘蛛を討とう。もし、我が兵の勢いに恐れて山野に隠れたら、後にきつと災いをなすだろう」と言いました。

椿の木を取って椎(槌)を作り、これを武器としました。強い兵を選んで椎を授け、山を穿ち草を払って、石室の土蜘蛛を襲い、稲葉の川上に破り、ことごとくその仲間を殺しました。

血は流れて、踏まで浸かりました。当時の人は、椿の椎を作ったところをつばき市と呼び、また、血の流れたところを血田とよみました。

また、打猿を討とうとして、禰疑山を越えました。そのとき、敵の射る矢が、横の山から飛んできました。まるで降る雨のようでした。

天皇は城原に帰り、占いをして、川のほとりに陣を置きました。そして兵を整え、先ず八田を禰疑山にうち破りました。

打猿はかなわなれないと思って「降伏します」と言いました。しかし許されず、皆、自ら谷に身を投げて死んでしまいました。

天皇は敵を討つため、柏峡の大野に宿りました。その野に石がありました。長さ六尺、巾三尺、厚さ一尺五寸。天皇は神意をうかがう占いをして、「私が土蜘蛛を滅ぼすことができるのなら、この石を蹴つたら柏の葉のように舞いあがれ」と言いました。

そして蹴ると、柏の葉のように大空に舞い上がりました。それでその石を名づけて「踏石」といいます。

このとき、お祈りされた神は志我神、直入物部神、直入中臣神の三神でした。

十一月、日向国に着いて行宮を建てて住みました。これを高屋宮といひます。

十二月五日、熊襲を討つことを相談しました。

天皇は群卿たちに「聞くところによると、襲の国に厚鹿文、迓鹿文という者がおり、この二人は熊襲の強勇の者で手下が多い。これを熊襲の八十梟帥

と言っている。勢力が盛んでかなう者がない。軍勢が少なくは、敵を滅ぼすことはできないだろう。しかし、多勢の兵を動かせば、百姓たちに害となる。兵士の威力を借りないで、ひとりでにその国を平定できないものか」と言いました。

一人の臣が進み出て言いました。「熊襲梟帥に二人の娘がいます。姉を市乾鹿文といい、妹を市鹿文といひます。容姿端正で気性も雄々しい者です。沢山の贈物をして手下に入れるのがよいでしょう。梟帥の様子をうかがわせて不意を突けば、刃に血ぬらずして、敵を破ることもできましょう」

そこで贈物を見せて二人の女を欺いて味方につけました。天皇は市乾鹿

文を召して騙すために寵愛しました。市乾鹿文は天皇に「熊襲の従わないことを気になさいます。私に良い案があります。一人二人の兵を私につけて下さい」と言いました。

家に帰って強い酒をたくさん用意して父に飲ませました。すると酔って寝てしまいました。市乾鹿文は密かに父の弓の弦を切っておきました。そこへ兵の一人が進み出て、熊襲梟帥を殺しました。

天皇はその不孝の甚だしいことを憎んで市乾鹿文を殺させました。妹の市鹿文を火国造に賜わりまし

た。十三年夏五月、ことごとく襲の国を平定しました。高屋宮にお出でになること、すでに六年になりました。

その国に美人があり御刀媛といひます。天皇は御刀媛を妃とし、豊国別皇子を生みました。これが日向国造の先祖です。

(次号につづく)